

玉川教会たより

NO. 487
 2016年11月20日
 町田市玉川学園4-5-32
 TEL. 042-732-9321
 FAX. 042-732-9337
 Eメール chiyosi514@yahoo.co.jp

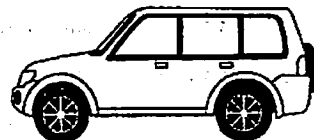
『人生の横断歩道で』

▼満員電車の中、隣で吊革を握っている80前後に見える男性に着信音、彼は電話に出て話し始めた。しばらくして、大声で言う。「電車の中だから、大声で話さないで、電車の中だから」。一瞬何のことかと戸惑った。勿論、電話相手の声は、隣に立つ私には聞こえない。しかし、「電車の中だから、大声で話さないで」。男性は2度3度と繰り返す。

▼電車の中で通話し、「電車の中ですから、電車の中ですから」と繰り返す人は多い。切りたくても出来ないのだろう。そもそも電話を取らない訳にはいかない人間関係なのだろう。上司か、顧客か。周囲に遠慮しながら、どうしても通話を切れない、多分サラリーマンの悲哀だ。同情する。… 以上の話には、特に教訓も感想もない。見たままだ。

▼車で左折しようとしたら、既に点滅している横断歩道を、80歳前後に見える男性が渡ってくる。仕方がない、待つしかない。真ん中に達しないうちに赤信号。車の方の信号も赤に。待つしかない。幸い近くの踏切が降りていて、直進してくる車はない。

▼男性は、歩道のほぼ真ん中で立ち止まり、運転席の私に向かってお辞儀する。待たせて申し訳ないということらしい。そして、振り返り、彼の妻とおぼしき女性に叫ぶ。「早く来なさい」。彼女は未だ歩道の向こう。「早く渡って。待って貰っているのだから」。

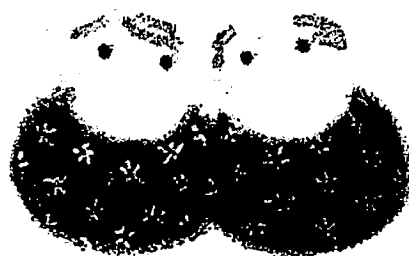


▼最近、高齢運転者による重大事故が頻発し、毎日のように報道されている。しかし、高齢者には、運転だけではなく歩行も危ないよと言いたいのではない。

80歳代の男性の多くは、奥さんと並んで歩くことが苦手らしい。2・3歩前を歩き、それでも根が優しい人は、荷物を持っていて、時々奥さんを振り返る。荷物は奥さんに持たせて自分はどんどん勝手に歩いて行くというような人は、この頃は少ない。

▼荷物を持って、2・3歩前を歩き、時々奥さんを振り返るとするのは、この世代の男性の人生そのものを顕しているような気がする。それを、特に批判する気はない。そういう生き方なのだろうと思うだけだ。しかし、老婦人の手を引いて歩いている男性の姿の方が、好ましいとは思う。

▼教会・信仰の前の横断歩道でも、同じことが起こっている。但し、この場合は、男女が逆転していることが多い。信仰を持って、常に2・3歩も前を歩き、時々だんなさんを振り返るとするのは、多くの教会婦人に見られる現象だ。夫は放っておいて、自分はどんどん勝手に歩いて行くというような人も、教会婦人には少なくない。それを、特に批判する気はない。そういう信仰なのだろうと思うだけだ。しかし、老いた夫の手を引いて、教会に導いてくる女性の姿の方が、好ましいとは思う。



樋野興夫先生・特別講演会

・『がん哲学外来・メディカルカフェ』

山崎弘之

「がん哲学」と聞いて、多くの人があるタイトルの意味を理解しにくいに違いない。私もその一人である。がんという病と哲学との関係が直接結びつかないのである。誰もがその繋がり立ち止まるのではないだろうか。その疑問を解く鍵は二つあったように思われる。

一つは、樋野先生は大学の病理部に所属し長年がん細胞と向き合ってきて、がん細胞に起きていることが人間社会にも共通することが分かったこと。がん細胞は正常細胞を浸潤する。がんは不良息子に喩えられる。不良息子は親を困らせる。まさにアナロジー（類似）である。しかし、がん細胞は正常細胞と共生している。この共生の程度から諸診断が下される。家庭の子と親との関係にも確固たる人格を通してカウンセリングがなされるように。まさに、がんから社会性を学んだのである。

もう一つは、「がん哲学外来」を通して多くの患者さんの相談に応じてきて、そこでまた啓発を受けてきたことである。病院ではたった3分間の診療である。相談にはほど遠い。病状の経過説明と薬の処方が終わってしまう。人対人の対応は忘れ去られている。会話があっても対話はない。ここにくさびを入れておかねばならない。「がん哲学外来」は現代医療の空白を埋めることに成功した。がん患者への癒やしの決め手は人間、やはり人格の確認であった。

患者さんから相談を受ける場合のキーポイントは聞き出すことであり、病状に加えて苦悩を引き出すことである。それには沈黙の一時も必要である。この沈黙という大切な時間は病院では到底不可能なことである。

樋野先生は述べる。病理学との出会いは医学者・山極勝三郎先生と吉田富三先生である。二人の先生から良き病理学者を学ばせていただいた。先生達からがんの病理学を通して、人と人とをとりなす対話の必要性を学ばせていただいた。医学はあくまでも人間のための科学であり、人格の陶冶であることをあらためて気づかされた。その核心を辿ると、キリスト教信仰に基づき証してきた、内村鑑三、新渡戸稲造、南原 繁、矢内原忠雄の言説や生き方を引かずにはおれなかった。これががんを哲学とを結びつける所以である。「私はここにいます、私を遣わして下さい。」（イザヤ書6章8節）

